

19世紀イギリスにおける読書施設の研究(1)

— コーヒー・ハウスについて —

芝 田 正 夫

1

「19世紀中にイギリスにおける読者数と出版物の数は驚異的な増加を示した」¹⁾とするアルティック(Altick, Richard D.)の言葉に端的に示されるように、19世紀イギリスにおいて都市労働者が新たに読者層として登場してきたことは疑問の余地のないところである。筆者は別稿において、こうしたイギリスにおける大衆読者層形成を促した社会的、経済的要因を分析する作業の一環として、当時の様々な読書施設について検討を加えた。²⁾ 大衆読者層形成と何らかの関連のある施設としてとりあげたのは次の諸施設である。

1. circulating library
2. coffee house
3. mechanics' institution
4. subscription library
5. working men's association

以上の諸施設について主に1849年に召集されたイギリス議会の公共図書館特別委員会報告書(以下委員会の議長名からエワート報告と略す)中の記述をもとに各々の性格および主たる利用者層を略述したが、³⁾ その中で19世紀中期にロンドン市内に約2,000軒あり、コーヒーなどの飲物を提供するとともに、

多量の新聞、雑誌、凶書を置き、読書をする場所をも提供したコーヒー・ハウスに特に注目をして、一般には17世紀に起源をもつ中流階級のサロンとして考えられているコーヒー・ハウスが19世紀において大衆読者層拡大に果たした役割を確明することを今後の課題とした。本稿ではこのコーヒー・ハウスに焦点をあて、既に様々な領域においてなされている先行研究に依拠しながら、その実態と読者層形成に果たした役割を考えていきたい。

2

まずコーヒー・ハウスとはいかなる施設であったのか。*Encyclopedia Americana*には次のような記述がみられる。⁴⁾

(コーヒー・ハウスは)交際のため、または思想や情報の交換のため、コーヒーを飲みながら人々が集まった場所である。(中略)イギリス最初のコーヒー・ハウスは1650年頃にオックスフォードに誕生し、次いでロンドンで1652年に設立された。その後急速に増加したが、扇動的な言動(seditious opinion)のセンターになることを恐れたチャールズ2世によって1675年に禁止令が出された。⁵⁾

コーヒーがヨーロッパに伝えられたのは16世紀で

- (1) Richard D. Altick, *The English Common Reader, A Social History of the Mass Reading Public 1800—1900*; Chicago: Chicago University Press, (1957), p.1
- (2) 拙稿「19世紀イギリスにおける大衆読者層の形成——読書施設の問題を中心に」(関西学院大学社会学部研究会『関西学院大学社会学部紀要』第40号 昭55年)
- (3) 同委員会の報告書の正式な名称は *Report from the select committee on public libraries: together with the proceedings of the committee, minutes of evidence, and appendix* 議長は下院議員ウィリアム・エワート(William Ewart)であった。
- (4) 1976年版による。*Encyclopedia Britanica* (1974年版)にも次のような記述がある。
コーヒーはロンドンのコーヒー・ハウスにおける飲物としてはじめて人気を得たが、コーヒー・ハウスは政治的、社会的、文学的、更には商業的影響力をもつセンターであった。
- (5) ただしこの禁止令はわずか11日で撤回された。(角山榮他『産業革命と民衆』昭50年 河出書房新社 p.108)

あるが、コーヒー・ハウスはコーヒーを飲むための場所ではなく、設立当初からサロンないしは集会場としても機能をし、政治的な問題を始めとする様々な討論や情報交換の場であったと考えられる。さらに *Americana* の説明を引用する。

18世紀中期がイギリスのコーヒー・ハウスの黄金時代であった。ロンドンだけで2,000軒以上のコーヒー・ハウスが存在した。客筋とそこでなされた会話のタイプにより特徴をもった店もあった。⁶⁾ (中略) コーヒー・ハウスは18世紀後期以降は衰退し始めた。衰退の理由はクラブやパブ、それに新聞がコーヒー・ハウスの機能の多くを奪ったからである。

以上の記述をみる限りでは、コーヒー・ハウスは18世紀にロンドンを中心に栄えたおそらく上、中流階級の社交場として位置づけられよう。しかし18世紀後期には衰えたとき、19世紀のコーヒー・ハウスについては触れられていない。ただ新聞の発達でコーヒー・ハウスの機能を奪ったとの指摘は、コーヒー・ハウスが新聞を読む場所としても機能したことを推測させる。

しかし前述のように、1849年当時にロンドンに数多くの労働者向けのコーヒー・ハウスが存在したことは、当時の記録が実証していることも事実であり、18世紀のコーヒー・ハウスと19世紀のコーヒー・ハウスの関連を明らかにすることが次の課題となろう。

3

コーヒー・ハウスについては次のような多様な分野において、それぞれの領域に関連した施設として紹介がなされている。

(1) 生活史研究の一環として

(2) 新聞史、特に「言論の自由」確立に果たした
コーヒー・ハウスの役割に注目して

(3) 社会教育史のなかで

まず生活史研究においては川北稔氏が『産業革命と民衆』（角山榮他、1970年）においてコーヒー・ハウスを紹介している。⁷⁾ 同書によると、イギリスにおけるコーヒーの歴史は「たんなる飲み物としてのコーヒーそのものよりは、それを飲む場所つまりコーヒー・ハウスの歴史」であり、コーヒー・ハウスは「あらゆる階層の人たちがあらゆる種類の話題について論じあい、語りあった情報交換のセンターのことであり、暇つぶしの場のことであり、反政府陰謀の震源地であり、商品や株の取引所であり、はたまた新思想の醸成の場」でもあった。⁸⁾ そして「コーヒー・ハウスの喧噪こそは、イギリス市民文化のうぶ声だった」と評価している。

同書の記述によれば、18世紀コーヒー・ハウスの機能は次のように要約できるだろう。

- (1) 情報センターであり、世論形成の場
- (2) 新聞、雑誌の閲覧室
- (3) 経済的な取引の場
- (4) 「文壇」形成の拠点

コーヒー・ハウスの全盛期は1680年代であり、ロンドンだけで2,000～3,000軒あったが、1730年代には「急速に人気を失ない」、上級階級向けのコーヒー・ハウスはメンバーを固定した閉鎖的なクラブへと変遷し、庶民向けの店は、コーヒーや紅茶だけでなく、アルコールや食事も提供するいわばレストランへ変わっていったと説明されている。以上のように、コーヒー・ハウスは当時の新興階級であった中流階級のための施設として描かれているが、19世紀のコーヒー・ハウスについては触れられていない。

(6) 例えば、Will (コーヒー・ハウスの名) や Button は文学好きのインテリが集まり、ジョンソン博士 (Dr. Johnson) や新聞発行者として著名なアディソン (Joseph Addison) やスティール (Sir Richard Steele), それにスウィフト (Jonathan Swift) らが常連であった。社交界の紳士淑女は White に集まり、Garraway や Lloyd には商人が集まったと伝えられている。

(7) 角山榮他 前掲書

(8) 前掲書 pp.95-96

なお次の書物にも同様のコーヒー・ハウスについての記述がある。

角山榮 茶の世界史 緑茶の文化と紅茶の文化 昭55年 中央公論社 (中公新書) pp.32-38

次に新聞史の領域であるが、佐藤毅氏によると、⁹⁾ コーヒー・ハウスは「多様な言説と情報がとび交い、衝突しあう『共通』の場所、いわばトポス(Topos)であったといってよいだろう。それはミルズの言葉をかきついで『文化装置』であり、しかもハーバースのいう『批判的公共性』によって貫かれていた」。18世紀前期のコーヒー・ハウス衰退後は、コーヒー・ハウスの中で成長した近代型新聞こそ、「コーヒー・ハウスに代わる新たな『トポス』を創出すべきであった」が、印紙税や誹毀法など「言論の自由」を実質的に制限する制度があったために、事態は簡単なものではなかったと述べ、ジャーナリズム史でのコーヒー・ハウスの位置づけがなされている。しかし、ここでも18世紀中期にはコーヒー・ハウスは衰退したとされ、それ以後の推移については述べられていない。

19世紀に存在したコーヒー・ハウスについては磯部佑一郎氏がわずかな記述ながら、次のように記している。やや長くなるが関連部分を引用する。

(産業革命期に)読者大衆の意を迎えて、新聞や定期刊行物の類を広く読ませたのは、コーヒー・ハウスや酒場であった。こうした場所が新聞雑誌の「読み物」を提供してきたことは、遠くチャールズ2世の時代から、紆余曲折の社会状況と、起伏変転の新聞界の状態が続く間、少しも変わらない社会的な習性とはなっていたが、イギリス産業革命後はこれに拍車がかげられた。ひところロンドンに僅か14、5軒しかなかったコーヒー・ハウスや酒場などが、ぞくぞく出現し、1840年頃ともなると1,600軒にふえ、しかも日増しに増加する一方であった。同年、ある店では1杯のコーヒーを1ペニー半で飲ませたが、当時の大小新聞報道紙

を43部も備え、これに地方紙7種、外国紙6種、雑誌24種、季刊紙4種、週刊紙11種も取揃え、ここに集まってくるお客に奉仕したという。¹⁰⁾ ここでようやく19世紀中期のコーヒー・ハウスに関する叙述に出会ったが、チャールズ2世時代のコーヒー・ハウスとの関連など詳細な点には触れられていない。

4

コーヒー・ハウスの持つ「あらゆる階層の人々が集まる場所」という機能を重視する立場にたった社会教育史、成人教育史の領域からの研究もなされている。ここでは奥田泰弘氏の研究をとりあげた。¹¹⁾

奥田氏は主にケリー(Kelly, Thomas)の所説を紹介しているが、まず次のようにコーヒー・ハウスの特徴を述べている。

(コーヒー・ハウスは)お金を払いさえすれば、誰でも、身分に関係なくナイト(knight)であろうと平民(commoner)であろうと、主教(bishop)であろうと牧師補(curate)であろうと、富める商人であろうと貧しい徒弟であろうと、空いている席に自由にすわって、誰とでも話すことができ、どのような討論にも加わることができる。¹²⁾

こうした理解のうえで、コーヒー・ハウスを「17世紀後半以降、イギリスの市民階級が集まった一種のクラブ・ハウス」と規定し、「新興市民階級にわたる知識と教養の源泉であった」とその機能を述べている。さらに、新興市民階級のみではなく下層階級も自由に利用のできたコーヒー・ハウスは「近代的であり民主的な文化機関」であったと評価している。しかし、17世紀末には特定の会員のみ利用と

(9) 和田洋一編 新聞学を学ぶ人のために 昭55年 世界思想社 pp.154—155

(10) 磯部佑一郎 イギリス新聞物語 昭49年 ジャパンタイムズ pp.67—68

(11) 奥田泰弘「コーヒーハウスの研究——その序論的試み」(岡本包治、山本恒夫編 社会教育講座1 社会教育の理論と歴史 昭54年 第一法規 所収)

(12) 前掲論文 p.264

ここで引用されているケリーの著作は次の通りである。

Thomas Kelly, *A History of Adult Education in Great Britain, from the middle ages to the twentieth century*; Liverpool: Liverpool University Press, (1962) (なお1970年に第2版が刊行されている。)

なり、民主的な性格も失われ、下層階級の人々は利用できなくなっていったとその後の推移をたどっている。

コーヒー・ハウス研究を深めることは今後の課題としながらも、奥田氏はコーヒー・ハウス研究の意義として次の二点をあげている。¹³⁾

- (1) 近代社会教育の源流を明らかにするためにコーヒー・ハウス研究は欠かせない。また従来のイギリス教育史研究の大きな空白を埋めることができる。
- (2) 現代における社会教育施設の源流をさぐることにつながる。

(1)については、近代社会教育は「市民階級の、市民階級による、市民階級のための社会教育」であるから、新興市民階級の活躍の場であったと推定されるコーヒー・ハウスは近代社会教育の最初の形態ではないかとする立場である。

(2)については、日本独自の社会教育施設である公民館との類似点がコーヒー・ハウスにあるのではないかという仮説を提出するとともに、博物館、図書館の源流をもコーヒー・ハウスに求めようとする観点である。すなわち、初期のコーヒー・ハウスが果たした諸機能が分化、発展をして、18世紀以降、クラブや博物館、図書館へと変遷していったとする推論である。確かにコーヒー・ハウスは前述のように多くの図書を所蔵するとともに、「客寄せのために、海外のめずらしい生物の標本、民俗資料などをおく」¹⁴⁾ところもあり、博物館的な役割をもっていたことも事実である。

以上が奥田氏の所説であるが、論文中でコーヒー・ハウス研究はこれから始まると述べられているように、コーヒー・ハウスの実態の紹介と、社会教育史における位置づけ、研究の視点を示しただけで、その実態についてもケリーの研究の紹介のみにおわっている。また17世紀末にはコーヒー・ハウスの機

能は変質し、18世紀以降は他の諸施設に分化していったという説をとり、19世紀のコーヒー・ハウスについては言及されていない。

5

今日までいくつかの領域で行われてきたコーヒー・ハウス研究をまとめると次のようになるだろう。

(1)17世紀中期以降、コーヒーを飲料とする習慣が広がるとともに、安価な料金でコーヒーを飲ませるコーヒー・ハウスが都市部に出現し、特にロンドンにおいて発展した。

(2)コーヒー・ハウスは、単に飲み物を飲むだけでなく、あらゆる階層の人々が集まり、様々な話題について情報交換をしたり、議論したりする集会場でもあった。

(3)ときには反政府派のたまり場になることもあり、「コーヒー・ハウス禁止令」(1675年)が出されたこともあった。

(4)コーヒー・ハウスはそこに集まる特定の利害や関心をもつ人々の集団をつくりだした。例えば、文学関係者が多数集まるコーヒー・ハウスが生まれ、そこに一種の「文壇」を形成した。

(5)新興市民階級という一定のリテラシー(読み書き能力)をもつ階層が利用者の主力であったため、情報を求める要求は、新聞や雑誌の要求に直接結びついた。例えば当時のSpectator紙について「一部を平均20人がコーヒー・ハウスでまわし読みをする」¹⁵⁾といわれたように、新聞や雑誌の読者層形成に一定の役割をもっていたと推察される。

(6)ところが18世紀の初頭には、アルコール類を出すコーヒー・ハウスや、特定の会員のみしか利用できないコーヒー・ハウス(やがてクラブになる)が出現し、初期の性格は失われ、コーヒー・ハウスは衰退し始めたといわれている。しかし19世紀中期にもコーヒー・ハウスという名称の施設が主にロンド

(13) 前掲論文 pp.266—272

(14) 角山榮他 前掲書 p.146

(15) 前掲書 p.114

ンに多数存在した。

以上のまとめにしたがって、本稿の課題である19世紀における大衆読者層形成にコーヒー・ハウスが果たした役割を明らかにする作業の手がかりとして、当面次の二つの課題を設定したい。

- a. 18世紀初期に衰退したといわれる“初期”コーヒー・ハウスと19世紀中期に主にロンドンに多数存在したコーヒー・ハウスとの間には歴史的な連続性があるのか。
- b. またそれらの間には、利用者層や機能の点でどのような相違があったのか。“初期”コーヒー・ハウスについては既に調べたように、新聞や雑誌の読者の増加を促したことが推察されるが、19世紀コーヒー・ハウスはどうであったのか。

6

19世紀のコーヒー・ハウスの性格を考える前に、アルティックの所説にもとづいて、19世紀における大衆読者層成立について若干のまとめをしておきたい。¹⁶⁾

ヴィクトリア期(1837-1901)における大衆読者層(reading public)は、今日考えられるような“まとまった(cohesive)”な集団ではなく、“均質的な(homogeneous)”集団でもなく、“公衆の群(cluster of publics)”にすぎなかった。上流階級の読者は18世紀と比較して読書の質量とも大きな変化はなく、中流階級の読者は余暇の増大とともに、一定の時間を読書にあてることができたが、ともに大衆読者層形成とは直接の関連はなかった。

新しい読者層形成の中核をなしたのは労働者階級である。彼らが本を読んだことは確かな事実であるが、いくつかの不明な点があり、どれほどの読者が生まれ、どのような読書がなされたかについては正確には把握されていない。

読書を規定した要因としてまずリテラシー(読み書き能力)の問題があるが、19世紀における民衆教育は、リテラシーの養成には非常に不充分なものであった。リテラシーに関する統計として、結婚署名簿にサインすることのできた者の統計があるが、1841年には男子67%、女子51%、1900年には男女共に97%となっている。しかし、自己の名前を書くことができたとしても、それが自由に読書をする能力にはすぐには結びつかない。またこの統計は全国調査であり、労働者階級のみを調査すれば、はるかに低い数字になることは確実である。より信頼できる統計としては、1833年にロンドンの職人層(artisan)を対象にした調査があるが、子供をもつ成人のうち74%は読むことができたが、残り26%は文盲であった。また1845年のイギリス中部(Midland)での調査では、初等学校に1年半以上在学した者のうち、75%は実質のある読書はできなかった。

すなわち、短期間の学校教育を受けたとしても、卒業後に読書をする機会も必要性もなければ、読み書き能力を失う者が多数いたのである。例えば、1867年の第二次選挙法改正によって都市の労働者が選挙権を獲得したが、実際の選挙では戸別訪問がさかんに行われたのも文盲が多かった当時の事情のためであった。

住居を始めとする生活環境も読書と深い関連を持っていた。長時間の激しい労働のあとでは、本や雑誌を読もうとする暇も意欲も生まれなかつただろうし、騒々しい狭い住居では落ち着いて読書をする場を労働者は確保できなかったであろう。不十分な室内照明は、栄養不良ともあいまって、目を極度に疲れさせ、長時間の読書を不可能にした。こうした外的な諸要因が、読書をする能力をもち、意欲をもっていた者も読書から遠ざけたのである。

しかし19世紀後期には、こうした悪条件も次第に改善され始め、労働時間も少しではあるが短縮されたこともあり、経済的な余裕を持ち始めた労働者が読

(16) Richard D. Altick, *Victorian People and Ideas*; New York: W.W. Norton & Company, (1973) pp.59-64

者層として形成されていった。劣悪な住居の条件の改善は進まなかったが、当時増加しつつあった公共図書館が静かな読書の場を提供した。しかし同時にこの時期には余暇を満す手段として読書の強敵があらわれた。音楽ホール、安価で入場することのできる劇場、スポーツの普及、教会の行事、公園、鉄道を使つての旅行などである。

では労働者はどのような内容の本を好んで読んだのであろうか。なかには“まじめな(serious)”本を求める、知的好奇心の強い労働者もいたが、多くの労働者は“十分に読み書きできない者(semiliterate)”を対象に書かれた、娯楽本位の図書や新聞を読む程度であった。内容のある読書をするために必要な文学上のあるいは歴史的な知識が欠如しており、十分に読みこなせなかったからである。こうした娯楽を求める読者のために、ダイジェスト版の安価な図書や新聞が多数出版され、大衆読者の支持を得ていた。

以上がアルティックの所説にもとづく19世紀中期から後期にかけてのイギリスにおける大衆読者層形成のアウトラインである。労働者階級にまで読書が拡大したことは事実であるが、読み書き能力は非常に貧しいものであり、その他生活環境など様々な外的条件も加わり、読みやすい娯楽中心の軽い読物や新聞がまず読まれ始めたのであろう。また劣悪な住居条件のもとで、公共図書館の必要性も強調されたのも19世紀中期であるが、コーヒー・ハウスも含めて、自宅以外の何らかの読書施設が存在が、読書を求める労働者にとって重要な要素であったことは否定できない。

7

では19世紀中期に存在したコーヒー・ハウスはどのような性格のものだったのであろうか。前述したエワート報告には、当時の読書施設についての関係者の証言が含まれているが、コーヒー・ハウスにつ

いては次のような証言がなされている。証言者はウィリアム・ラベット(Lovett, William)である。

- ロンドンには2,000軒のコーヒー・ハウスがある。
- コーヒー・ハウスはまじめな労働者が利用する施設である。
- コーヒー・ハウスにはアルコール類は置かれていない。多くの労働者はそこで読書をしている。
- 2,000軒のうち500軒は付属の図書室をもっており、蔵書冊数2,000冊というところもある。
- どのコーヒー・ハウスも労働者でいっぱい状態である。
- 雑誌、新聞代として週平均5ポンドを使う店もある。

エワート報告は主に読書および図書館と関連のある施設としてコーヒー・ハウスを捉えており、集会場やクラブとしての機能を当時のコーヒー・ハウスが持っていたかどうかは明らかではない。

19世紀のコーヒー・ハウスについては英米の研究者が様々な立場から言及している。まずケリーは次のような説明をしている。

コーヒー・ハウスは労働者の図書室を提供した。1849年にロンドンにおいて2,000軒のコーヒー・ハウスがあり、主に労働者によって利用されていた。ウィリアム・ラベットによると、そのうちの4分の1は図書室をもっており、2,000冊に達するものもあった。コーヒー・ハウスはその伝統として新聞も提供した。¹⁷⁾

ケリーのこの記述は、先のエワート報告のみに依拠したようであり、新たな事実は得られない。

次にウェッブ(Webb, R.K.)の記述をみてみよう。

パブ(public house)、ビール・ショップ、およびコーヒー・ハウスは新聞を読む場所であった。(中略)ラベットとクリーブ(Cleave)はコーヒー・ハウスを開き、彼らの読んでいた多くの雑誌をそこで宣伝した。¹⁸⁾

(17) Kelly, *op. cit.* p.176

(18) R.K.Webb, *The British Working Class Reader 1790—1848*; New York: Augustus M.Kelley, (1955) pp.33

更に1834年5月10日付の *Pioneer* 紙に掲載された投書によると、タイムズ紙がロンドン市内外の1,000軒のコーヒー・ハウスで購読されていたことが明らかであると述べている。

またアルティックも新聞を読む場所としてコーヒー・ハウスに注目をして、ロンドンだけで1840年までに1,600-1,800軒のコーヒー・ハウスがあり、中には日刊紙43部(一紙につき6部購入)を置き、更に地方紙、外国紙、24種の雑誌、4種の季刊紙、11種の週刊紙を置き、1日に1,500-1,800人の利用者のある店もあったと述べている。¹⁹⁾ またこうしたコーヒー・ハウスは全ての階層の人々に公開されて

いたが、主な利用者は職人(artisan)であり、地方には同種の施設として新聞室(newsroom)が存在していたことにも触れている。

以上の記述からは、19世紀のコーヒー・ハウスは新聞、雑誌、図書の読書施設として機能したもののようであったことは明らかになったが、“初期”コーヒー・ハウスのような“自由な情報センター”としての色彩はあまり強くは出てこない。

このあと、“初期”コーヒー・ハウスの持っていた読書施設としての機能を更に探るとともに、19世紀コーヒー・ハウスとの比較研究を行っていききたいが、以下は別稿にゆずりたい。

(19) Altick, *The English Common Reader* p.322,342

この部分の記述は磯部佑一郎氏の説明と同じ内容である。